

現代の仏教各宗の五条衣

川口 高風

一、現代の僧侶の服装

僧服は仏法服を略した法服ともいわれ、広い意味では袈裟のみならず坐具、褌衫、裙子、それに中国で成立した直綴（綴）や我が国で生まれた改良衣、作務衣など、僧侶の身につけるものすべてをさすようになった。しかし、本来は釈尊が制定した仏弟子の衣服すなわち袈裟を意味する。

袈裟は、インドでは身体をおおい寒熱を防ぐものであったが、仏教が中国に伝わると、寒熱を防ぐ衣服はすでにあるところから、その上に搭けて仏弟子の威儀を整えるものとなった。日本では朝廷を中心に受容せられ、僧侶も国家の規制下に入り、法服も宮廷の貴族の服装に準じて規定せられた。さらに仏教の宗派が生まれるや法衣の形態も宗派によって異なるようになった。

このように、元来は大きな布を細かく裁断して縫い合わせ、壊色に染めた五、七、九条の三衣が仏弟子の衣服であった。仏教が

中国や日本に伝来し氣候、風土、風俗が異なるのに従って、袈裟の下に着るものも法衣の一種とみなされるようになった。

現代日本の僧侶の服装は正装（正服）と略装（略服）に分けられる。正装とは司祭者の地位を表現するものであり、正式の法要時に被着する袈裟や直綴（綴）を着た姿である。略装は明治期以後に定まったものが多く、改良衣、改良服とも称された。洋服の形式がとり入れられたものもあり、戦後は洋僧衣、洋行衣、洋服法衣などとも呼ばれていた。略装は宗派による名称や形式は統一されておらず、各宗派で自由に拡大解釈して独自の形式が整えられていった。しかし、略装（略服）という概念は各宗派ともに共通している。

二、現代の仏教各宗の五条衣

現在、袈裟の着用方法や形が最も変わったのは、五条衣であろう。略装の五条衣をみれば、宗派が一目でわかるぐらいの相違がみられ、宗派の特徴を出している。これは明治期になって交通機関の利用や従軍僧の袈裟として案出されたともいわれている。これが改良服と併用されて今日の仏教各宗僧侶の最も省略された装束となった。しかも、それが今日でも変化が続いている。たとえば、宗紋とか寺紋を白く染め抜いたり、刺繍をしたり、織り込んでいる。さらに一層コンパクトにしたり、新しい形の五条衣が誕生しつつあるといっても過言でない。

本来の五条衣は梵語のアントラヴァーサカで、安陀会と訳され

る。下衣とも訳され、下半身をおおう下着である。中国では院内道行作務衣ともいい、室内で着る部屋着とか仕事着であったところから呼ばれた。それが後には縮小され、首から前につるして両肩から胸間に、あるいは左肩から右肩へ威儀でつるして胸をおおう形のものになった。さらに、それを縮小して五条衣を輪の形に折って作った折五条、輪袈裟ともなっていた。掛け方は改良衣、改良服を着用した上から搭けるのが一般的であるが、縮小されていない五条衣（五条袈裟）は直綴（綴）や素絹、空衣、色衣、黒衣などの上から搭ける。なお、改良衣や改良服は宗派によって特徴がみられ、名称も異なっている。たとえば、天台宗と日蓮宗では道服といわれ、浄土真宗本願寺派では布袍、真宗大谷派は間衣（かんえ、まごろも）という。

次に上座仏教の五条衣から奈良時代に生まれた法相、華嚴、律宗などの奈良仏教、平安時代に生まれた天台宗、真言宗、鎌倉期の浄土宗、時宗、融通念仏宗、浄土真宗、また、臨済、曹洞などの禅宗、それに日蓮宗の五条衣に分類してながめてみる。最初に井筒雅風「僧侶の服装」（上）（下）（「大法輪」第四十六巻第一号、第四号、第五号 昭和五十四年一月、四月、五月）にあるイラストから関係ある部分のみとりあげ、次に写真によって各種の五条衣を紹介してみよう。なお、江戸期に明から伝えられた黄檗宗は禅宗の分類に入れて考察した。

〔上座仏教〕

現在の上座仏教の袈裟は五条衣がほとんどである。筆者が所持している六枚の五条衣の大きさは、

- | | | |
|-----|-----------------|-----------------|
| (1) | 縦一八〇センチ
メートル | 横二六八センチ
メートル |
| (2) | 縦一八五センチ
メートル | 横二三八センチ
メートル |
| (3) | 縦二三七センチ
メートル | 横二〇五センチ
メートル |
| (4) | 縦一〇二センチ
メートル | 横二〇三センチ
メートル |
| (5) | 縦一五三センチ
メートル | 横二〇三センチ
メートル |

である。この中(1)(2)(3)は、ウツタラーサンガ（中衣）と同じ扱いで上半身をおおうものであった。そのため(4)(5)がアンタラヴァーサカ（下衣）とされており、縦九〇センチ、横二〇七センチの縵衣（条相のない袈裟）もアンタラヴァーサカと同じにみなされている。

これはバングラディッシュより愛知学院大学大学院へ留学していたギヤナ・ラタナ・テーラ氏よりの御教示であるが、条はミシンで縫われており、日本の袈裟よりかなり大きい。本来、五条衣は三衣のみの着用の場合、一番下に着けるものであった。そのため腰に巻きつけて下半身をおおう役目をもっていた。その後、涅槃僧（裙子）が作られたところから、涅槃僧が下半身をおおうものになっていった。

〔奈良仏教系〕

法相、華嚴、律宗などの南都六宗の僧は、紐部を左肩に掛けて右脇へタスキ掛けとする加行袈裟で統一している。名称は奈良袈裟、襴袈裟^{たすき}、南都袈裟ともいわれ、律宗では敬護袈裟ともいつている。加行袈裟は戦後に統一して制定されたもので、略儀の法要などでは五条衣（緋紋白）が用いられている。道中の装いとして金襴の五条衣も用いるが、真言律宗の西大寺では興福寺の迷企羅大將像が着装しているものと同じ前五条を使用している。

〔天台宗系〕

金襴などで輪にした輪袈裟や折五条、三千院門跡（梶井宮）より特許された由来による梶井袈裟といわれる曇袈裟を搭ける。信徒は半袈裟を用いる。法要では紋白の大五条（五条袈裟）や有職五条（山門五条）、看經には小五条を搭けており、回峰行者は、白木綿の小五条を搭ける。なお、紐は丸打ちの緒である。寺院内の常服として高位の僧は三緒の五条袈裟（三緒袈裟）が許されている。

〔真言宗系〕

輪袈裟または折五条とか折袈裟とも呼ばれる曇袈裟を搭ける。信徒は種子袈裟、咒字袈裟ともいわれる輪袈裟の半分を切りとった半袈裟を用いている。折五条は、紐が下部と胸前の二カ所につ

現代の仏教各宗の五条衣

けられて重複した形となっている。豊山派では、大正時代に小野塚幾澄氏が創案した小野塚五条を搭ける。禅宗の絡子と似ているが、紐の細いのが特徴である。法要によっては紋白の五条や威儀五条、割切五条が用いられ、高野山では学道の昇進によって墨袈裟、白袈裟、それに精好（甲）袈裟を着用している。

〔浄土宗系〕

輪袈裟を二つ折りにして両端を紐で結んだ折五条や伝導（道）袈裟（種子袈裟・種子衣）を搭け、信徒は半袈裟を用いる。また、禅宗の絡子に似た威儀細（小五条）も搭ける。ただし、絡子とは異なり環がついていない。後背の表には米、裏は△が縫い取りされている。

法要によつては大師五条、大師衣とも呼ばれる五条袈裟を搭ける。これは天台宗系、真言宗系と同じもので、元祖大師法然上人が在世当時に着用されていたことから呼ばれる。また、威儀細の大きなものの大五条は、禅宗の大掛絡と同じようなもので、左肩上に五条衣を搭け、右腕に威儀と後背を横にして搭ける。しかし、法要の配役によつては、脇掛けにする場合もある。なお、大五条は肩五条ともいわれる。現在では用いられていないが、大五条ほどの大きさで、威儀は小五条より細くて長い木蘭地の五条袈裟である廬山衣（現在、東京都・一行院蔵）もあった。

時宗は禅宗の絡子に似た前五条を搭ける。法要によつては前五条を大きくした横五条を搭ける。これは左肩から右脇下に搭ける

ところからカバン掛けにするともいわれる。前五条も横五条も環はついておらず、外側の威儀は田相の裏側へ、内側の威儀は田相の表側についている。また、左右の威儀の間は威儀幅分ほどをあけ、内側の威儀は前後ともに白い糸で膝かろげた飾りがある。後背はなく、威儀はタスキ状になって背後で縫いつけられている。

融通念仏宗は前袈裟を搭ける。これは時宗の前五条と似ているが、外側の威儀は丸打ちの緒になっている。後背は内側の威儀が結びつけられており、外側の丸打ちの緒は縫いつけられていない。なお、模様の縫い取りはない。時宗の横五条に似た小五条や浄土宗の大師五条と同じ大五条も用いており、輪袈裟である折五条も搭けている。

〔浄土真宗系〕

本願寺派では畳袈裟を用いるが、正式には輪袈裟と称している。形は天台宗の梶井袈裟と類似している。法要には大五条を用いるが、小五条袈裟は通常の晨朝しんじょう勤行の時に着用する。その他の小五条には墨袈裟や黄袈裟がある。門徒は門徒式章を搭ける。




真宗大谷派は畳袈裟か輪袈裟を用いる。勤行などの礼式には五条袈裟を用いるが、晨朝の内陣出仕の時のみは青袈裟を搭ける。これは晨朝袈裟ともいわれる。また、平常に常服として用いる墨袈裟もある。ただし、黄袈裟はない。門徒は略肩衣りやくかみぎぬを搭ける。

浄土真宗の各派の御門主は、帰敬式において三緒袈裟を着用する。これは天台宗の高位の僧が用いていたものと同じで、親鸞聖

人が青蓮院で得度し、叡山に登って修学したところから浄土真宗の御門主にも勅許されることになった。しかし、浄土真宗各派の三緒袈裟の威儀は、天台宗の三緒袈裟よりも短いようである。

〔禅宗系〕

臨済、曹洞、黄檗の各宗では絡子を搭ける。絡子は掛絡ともいわれる五条衣で、吊り紐（棹）には環がついている。高位の僧は正装時に大掛絡を肩に搭けるが、搭け方は妙心寺派では背後に、大徳寺派、相国寺派は正面（前に搭ける）に、東福寺派、南禅寺派は横に搭ける。曹洞宗も同じく横に搭けるが、両肩の外側に搭けている。黄檗宗は妙心寺派と同じく背後に搭けており、大掛絡は宗派によって搭け方が異なっている。

臨済宗と曹洞宗では棹の長さ、太さ、後背の縫い取りが異なっている。棹の長さは臨済宗の方が長く、太くて田相も大きい。黄檗宗は臨済宗よりもやや短くて細く、田相も少し小さい。後背の縫い取りは臨済宗が、曹洞宗は、黄檗宗はである。田相の裏面は、臨済宗が同色の一枚布を帖はっているのに対し、曹洞宗は白布で額装となっている。黄檗宗も同じ白布で額装である。黄檗宗は近年まで絡子はなかったが、臨済宗妙心寺派の影響によって制定されたといわれる。そのため大きさや棹の太さなどは臨済宗と曹洞宗の中間ほどである。なお、臨済宗では盆経などの時に五条衣を小さくした執事衣しゅうじえを搭けることもある。在家の参禅者には居士絡子が制定されている。

〔日蓮宗系〕

普段は五条衣を折り畳んだ折五条を左肩より右脇へ搭ける。これは明治八年に青森県の蓮華寺住職角田堯現氏が考案したものといわれたり、日露戦争の時、従軍布教のために創案された肩袈裟ともいわれている。法要では五条袈裟を搭けるが、その他に修法五条、清浄五条、小五条などもある。なお、信徒は襴袈裟^{たき}、または半袈裟（輪袈裟）を用いている。

本稿を執筆するにあたり、各宗の法衣店様より多くの御教示を得た。また、写真やイラストは「中外日報」や著作・論稿・商報などから転載させていただいた。ここに厚くお礼を申し上げます。

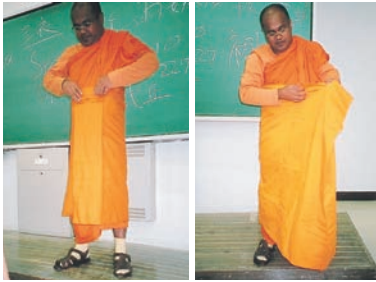
『著作』・『論稿』

- 中山玄雄『天台宗法式作法集』（昭和四十四年七月 金聲堂）
 『天台宗実践叢書』第五卷（平成四年三月 大蔵舎）
 『図説天台宗の法式』第一卷（平成十六年二月 斎々坊）
 『真言宗実践双書』第六卷（昭和五十七年十一月 大蔵舎）
 『真言宗莊嚴全書』（平成九年三月 四季社）
 『図説真言宗の法式』基礎篇 坤（平成十八年九月 斎々坊）
 『写真図解浄土宗の行儀』（昭和四十九年五月 浄土宗東京教区教務所）
 宍戸栄雄『本堂の莊嚴——付法服と執持——』（昭和五十二年八月 浄土宗近畿地方教化センター）
 『浄土宗莊嚴全書』（平成八年六月 四季社）
 『新住職必携』（平成十八年十月 西山浄土宗宗務所）

現代の仏教各宗の五条衣

- 『図説浄土宗の法式』第一卷（平成二十三年二月 斎々坊）
 『本願寺史』第二卷（昭和四十三年三月 浄土真宗本願寺派）
 『浄土真宗本願寺派の莊嚴全書』（平成八年八月増補改訂 四季社）
 『浄土真宗本願寺派 法式規範（改訂版）』（平成十一年一月 本願寺出版社）
 『真宗大谷派の莊嚴全書』（平成六年七月 四季社）
 『図説日蓮宗の法式』第一卷（平成八年七月 斎々坊）
 『日蓮宗莊嚴全書』（平成十三年四月 四季社）
 『日蓮宗実践叢書』第四卷（平成十五年四月 大蔵舎）
 井筒雅風『袈裟史』（昭和四十年二月 文化時報社）
 井筒雅風『法衣史』（昭和四十九年十月 雄山閣出版）
 『仏具大事典』昭和五十七年九月 鎌倉新書
 『幕末・昭和服装で綴る日本の風俗史』（昭和六十二年十月 中央文化出版株式会社）
 井筒雅風『僧侶の服装』（大法輪 第四十六巻第一号、第四号、第五号 昭和五十四年一月、四月、五月）
 井筒雅風『法衣のいろいろ』（大法輪 第六十九巻第四号 平成十四年四月）
 『商報』・『カタログ』
 『安藤商報』（法衣と仏具）
 『池澤法衣仏具店商報』
 『井筒商報』（御法務の栞）
 『大西商報』（浄土莊嚴）
 『川勝法衣商報』
 『北六法衣店商報』
 『後藤利商報』
 『さつま屋法衣店商報』
 『澤部法衣店商報』
 『柴田法衣店商報』
 『御法衣・京仏具』（松本屋）
 『湯浅興七商店商報』（御法衣と御仏具）

〔上座仏教〕



②

①

五条衣を腰に巻きつけて着用する順序



タイの五条衣



袈裟を搭げたタイの比丘



⑤



④



③

〔奈良仏教系〕



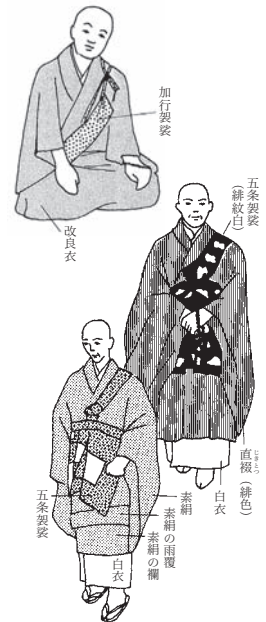
五条衣を搭げた姿（東大寺）

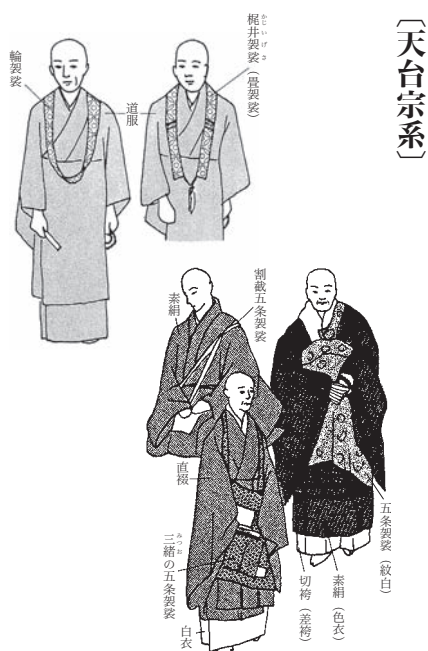


加行袈裟



加行袈裟を搭げた姿

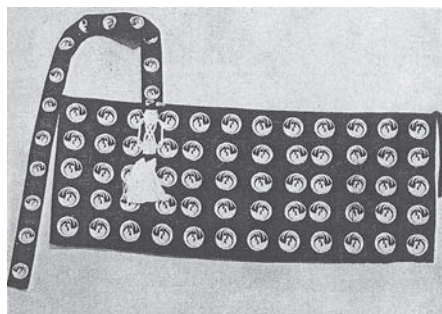




〔天台宗系〕



五条衣を搭けた横と後姿（法隆寺）



紋白の五条衣（法隆寺）



輪袈裟



梶井袈裟



半袈裟



折五条



前五条を搭けた迷企羅大將彫像（興福寺）



前五条（西大寺）



小五条を搭けた回峰行者



紋白大五条



有職五条



小五条（白木綿）



大五条（加行得度用）

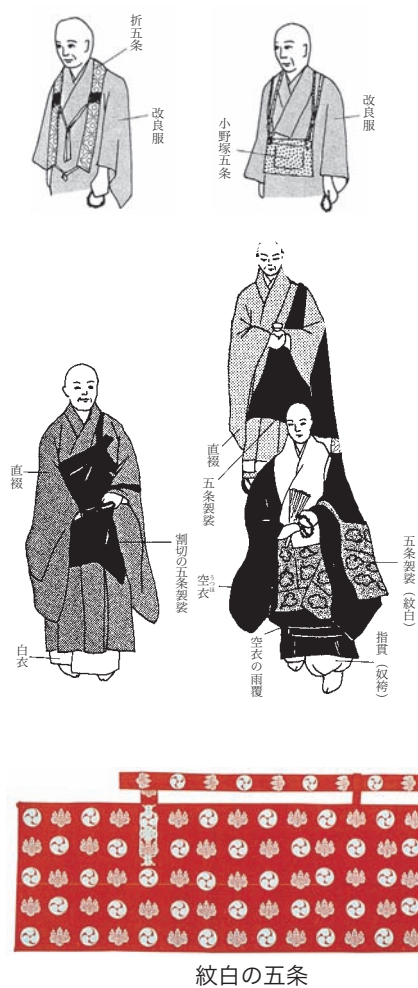


三緒の五条袈裟



小五条

現代の仏教各宗の五条衣



紋白の五条

〔真言宗系〕



三緒の五条袈裟を搭けた後姿



略袈裟



半袈裟



輪袈裟



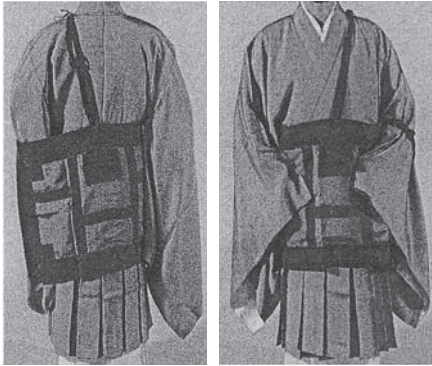
威儀五条を被着した姿



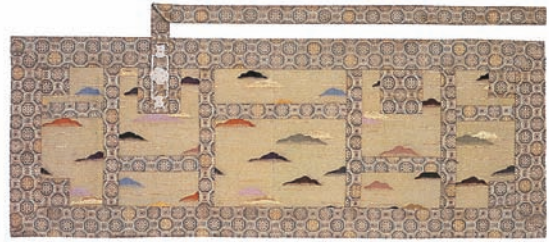
小野塚五条



折五条



割切五条を搭けた正面と後姿



威儀五条



割切五条



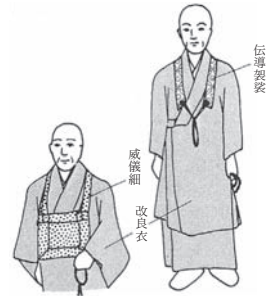
威儀細



半袈裟



伝導袈裟(種子袈裟・種子衣)



〔浄土宗系〕



後背の表の
縫い取り



後背の裏の
縫い取り



折五条





大師五条



大五条



大師衣



大五条を搭けた姿



時宗の前五条



廬山衣の表



廬山衣の裏



大五条の脇掛け



融通念仏宗の小五条



融通念仏宗の前袈裟と折五条



時宗の横五条



大五条の着用

小五条の着用

折五条の着用

融通念仏宗の御回在の途中で
(平成3年10月「融通念仏宗
—その歴史と遺宝—」より)



時宗の横五条を搭けた姿



伝導袈裟



折五条



威儀細

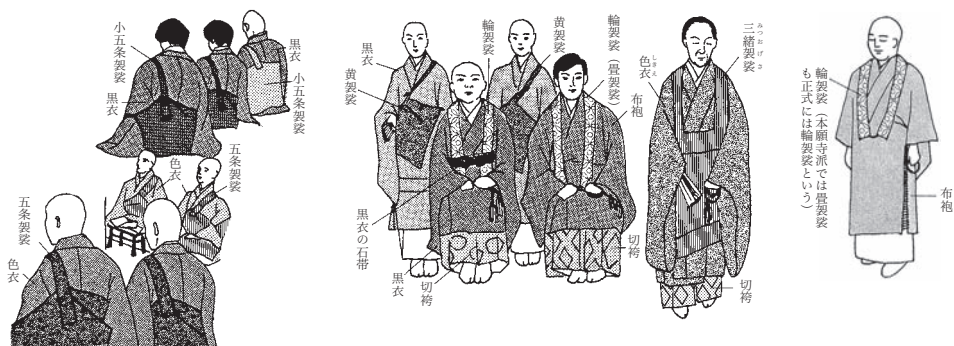


大師五条

【浄土真宗本願寺派】

〔浄土真宗系〕

現代の仏教各宗の五條衣



黄袈裟を搭げた姿



黄袈裟



墨袈裟を搭げた姿



輪袈裟を搭げた姿



浄土真宗本願寺派輪袈裟（疊袈裟）



墨袈裟（浄土真宗本願寺派）



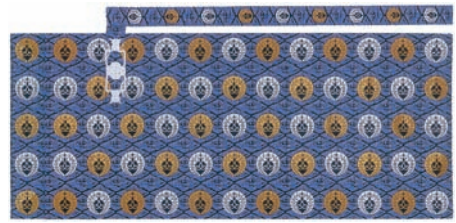
墨袈裟の威儀



門徒式章



五条袈裟を搭げた姿



五条袈裟



小五条



門徒略肩衣



暈袈裟



輪袈裟

真宗大谷派

【真宗大谷派】



五条袈裟 (部分)



青袈裟 (晨朝袈裟)



墨袈裟 (真宗大谷派)



墨袈裟の威儀



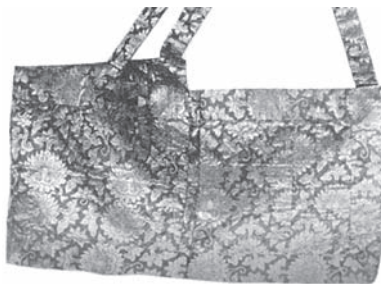
東本願寺の大谷光見法主
の三緒袈裟の姿



大谷本願寺の大谷光道当主の三緒袈裟の姿
(「中外日報」平成18年1月1日より)



三緒袈裟を搭けた
大谷光道当主の横の姿



正親町天皇御下賜三緒袈裟
(『本派本願寺 真宗写真宝典』より)



真宗興正寺第三十世本賢上人の帰敬式
(平成23年4月 特別展観「興正寺展」より)



臨濟 黄檗 曹洞
各宗の絡子の裏面



臨濟宗の絡子



〔禪宗系〕



曹洞宗の絡子



黄檗宗の絡子



臨濟宗の大掛絡



臨済宗の居士絡子



後背の縫い取り（臨済宗）



後背の縫い取り（曹洞宗）



後背の縫い取り（黄檗宗）



臨済宗の執事衣



執事衣を搭けた姿と後姿



曹洞宗の大掛絡を搭けた姿





天龍寺派佐々木容道管長晋山式に参列した
臨黄各派管長、師家、宗務総長ら
(平成21年10月17日「中外日報」より)



博多・大徳寺派崇福寺の岩月海洞住職晋山式に
参列した各派の管長、師家ら
(平成22年10月7日「中外日報」より)



半袈裟 (輪袈裟)



たすき
襷 袈裟



折五条



〔日蓮宗系〕



五条袈裟



五条袈裟を搭けた姿



修法五条



小五条



清浄五条